

# プロが FOCUSRITEを 選ぶ理由

1985年に伝説のコンソール・デザイナー、ルパート・ニーヴにより創始されたFOCUSRITE。以降、名機ISA 110を皮切りに、アナログ機器の最高峰とも言えるマイクプリ／コンプレッサー＝ISAシリーズからダイナミック・コンボリユーション技術を採用した新世代のLIQUIDシリーズまで5シリーズを展開。デジタルとアナログ両極において魅力的な製品を数多く世に送り出し、世界中のトップ・エンジニアから大きな支持を集めている。本稿では、先ごろNAMMショウで披露されたばかりのマイクプリISA One、LIQUIDシリーズの最新機LIQUID 4 PREのレビューを中心に、開発者やユーザーに取材を敢行。世界のプロ・エンジニア／ミュージシャンがなぜFOCUSRITEを選ぶのか？ その秘密を、徹底解析していこう。

Photo: Hiroki Obara



  
Focusrite®



開発者インタビュー

## ロブ・ジェンキンス

Translation: Peter Kato

## LUNDAHL製トランスがISAサウンドの鍵です

## 優れた基本設計と時代に合わせた改良

●ISA 110をはじめとするFOCUSRITE製品は世界中のエンジニアから高い評価を得ています。その理由はどこにあるとお考えですか？

○ISAシリーズの製品が長きにわたって人気を博していることは事実で、そうした成功の裏には優れた設計と高品位コンポーネンツの採用に加え、現代のエンジニアのオペレーションやニーズに合わせた設計の変更／改良といった要因があると考えられます。“基本クオリティの高さ”“時代に合わせたアップグレード”という2つのファクターは、20年以上前に1号機が発売されたISAシリーズの設計コンセプトの要として、今なお受け継がれているものです。

●“透明な”と形容されることも多いISAシリーズの音質ですが、設計上の秘けつはどのような部分にあるのでしょうか？

○ISAのサウンドを形容するのに“透明な”という表現を使うのは、まさに言い得て妙だと思います。マイクプリから得られる音は、その機材自体に採用されている部品や回路設計だけでなく、どのような外部装置とどう接続されているかによっても大きく左右されます。つまりマイクプリのサウンドは、外部装置とのインターフェースと内部回路という2つの要素によって決定されているのです。もちろんISAも例外ではなく、マイクという外部装置のサウンドを大切に、それをそのまま聴かせることを重視する設計にしたことで必然的にあのようなキャラクターが得られたのです。そのマイクとのインターフェースは、LUNDAHL製のトランスによってつかざどられています。スウェーデンの工場で作られたISA 110に採用して以来、どのISAモデルにも一貫して使い続けているものです。その特徴としては、マイクの低出力インピーダンスとマイクプリの入力インピーダンスとの間に発生する相互作用が相殺されるよう、二次巻線にZOBELネットワークを採用することでトランス・インピーダンスを補正している点にあり、これが独特の素晴らしい空気感を生んでいるのです。ほかのマイクプリを使用した場合と比べサウンド全体がよりクリアに向上し、さらに言

えばルーム・アンビエンスや楽器の倍音がより明確に伝わるようになるため、とりわけ高域レンジにおける音質差は歴然としたものになります。

回路構成について言えば、トランスとプリアンプによるゲインのシェアリング構造を採用しました。こうするとプリアンプのアクティブ回路がゲインの上限を超えた範囲で作動しなくなるため、システム内部のアクティブ・ゲインが抑えられ、周波数レスポンスと位相のひずみを最小限に低減できます。

## プロの音を手軽に楽しめる新製品ISA One

●ISA Oneはホーム・スタジオでの使用を前提に設計されたように感じます。近年のレコーディング環境の変化をどのようにとらえていますか？

○FOCUSRITEでは、レコーディング業界のトレンド推移を1990年初頭より追いつけています。ですからコンソールを使った録音から人々が離れ始めたときもそうした変化をいち早く察知し、ISA/Redシリーズを開発しました。その後のデジタル・メディアの台頭、さらにはデジタル全盛時代の訪れとともに、プロジェクト・スタジオ、さらにはホーム・スタジオが私たちのターゲットとする市場へと成長してきました。こうした録音環境の変化は極めて自然なものだと思います。私たちの業界も、コンピューターの処理能力によってもたらされる恩恵を数多く享受していますからね。ただし、こうした変化の中で失

われたものがあることも事実で、その1つが“クオリティ”ではないかと感じています。もっともこれも、アナログ→デジタルという技術変革の中で起こるべくして起こった現象で、必然的な流れだと思います。なぜならデジタル初期の機器の性能や処理方法は極めて限られたものでしかなく、ユーザーの多くはコストと引き換えに音質／性能に目をつむるしかなかったからです。転じてデジタル技術が成熟した現在、録音という作業の本質が再び見つめ直され、音質に対する理解もより深まっているように感じられます。そうした流れを察知した私たちは、ユーザーが小規模な環境でもプロ・クラスのサウンドを手軽に扱えるよう、ISA Oneを市場に投入したのです。

●ISA Oneを導入することによって、ユーザーはどのようなメリットを得られるのでしょうか？

○ひと口で言えばサウンド・クオリティです。優秀なプリアンプの導入は、どんなアップグレードよりも劇的にDAWシステムの音質を向上させてくれるものです。優れたレコーディングにこだわりの、よりよいサウンドで自分の音楽を世界に発信したいのなら、決して無駄な投資とは思わないと思います。“ゴミを入れてもゴミしか生まれない”という古いことわざは今なお生きています。優秀なマイクプリとコンバーターを使ってクリーンなオーディオ信号を取り込まなければ、DAWのビット・デプスをどんなに高くしても意味が無いのです。

## Line Up



## ■ISA 430 MKII

420,000円(アナログ) 498,750円(Digital Board 430II付)  
ISA 110のエッセンスを受け継ぐチャンネル・ストリップ。高品位トランスとクラスA・ディスクリート回路により透明な音像を実現



## ■ISA 428

315,000円(アナログ) 420,000円(Digital Board 428付)  
マイク&インストゥルメント入力×4、ライン入力×8、アナログ出力×8が可能な4chマイク/ライン・プリアンプ。VUメーターも4基搭載



## ■ISA 220

283,500円(アナログ) 362,250円(Digital Board 220付)  
ISA 430からスタジオ・ワークに必要な主幹部分のみを抽出。マイクプリ、EQ、コンプ/リミッターに加えディエッサーも搭載



## ■ISA 828

388,500円(アナログ) 493,500円(Digital Board 828付)  
2Uのボディに高品質ISAプリアンプを8基搭載。マイク&インストゥルメント、ラインが各8ch分入力でき、アナログ出力×8に対応



# Professional ISA Series



## 01 今剛

### ISAシリーズはハイファイで ギターによく合うサウンドです

Photo: Hiroki Obara  
取材協力: TOSHIKI KADOMATSU  
Performance 2007~2008 "Player's Prayer" RETURNS/  
Kon's Guitar Technician: 杉山栄道 (フィールド・ギア)

卓越したテクニックと音質へのこだわりで宇多田ヒカルをはじめ数多くのセッションに参加しているギタリストの今剛氏。取材時の角松敏生のステージ上にもISA 430×2をはじめ計5基のFOCUSRITE製品が持ち込まれていた。

通常、エレキギターのクリーンなサウンドにはギター・アンプ／プリアンプはあまり使わず、インピーダンスの変換だけして直接ISA 115HDに入力し、EQして鳴らしています。

アコースティック・ギターも、ライブの際はDIを介してISA 115HDに直接入力し、コンプ／リミッターを経由してミキサーに立ち上げています。ほかにマンドリンやガット・ギターにはそれぞれ専用のISA 430を持ち込んで音を作ったりしています。

ステージ上での操作性に関しては慣れもあるのですが、ISA 115HDはEQの周波数帯域つまみが左から右へ“低／中／高”と並んでいて、演奏しながら操作しなければならない場合でも分かりやすい。フィルター／EQのポイントも好みの感じで

す。あと、やはりパネルやつまみの色など、デザイン的にも好きですね。

FOCUSRITE製品の音の特徴はすごく分かりやすく言ってしまうと“ハイファイ”。レンジが広く、どんなダイナミクスにも対応して表現できるような、“近く”で力強く、クリアなサウンドです。個人的にはSN比の良さと周波数帯域の広さ、EQしてもあまりEQくさくならない品の良さなどが気に入っています。とにかく、ISAシリーズはギターにとってもよく合うサウンドだと思います。

## 02 伊藤圭一

### アナログ／デジタルの融合を実践する 数少ないブランドの1つ

Photo: Chika Suzuki



エンジニア／プロデューサーとしてストイックに“良い音”を追求し続ける姿勢が高い評価を得ている伊藤圭一氏。厳選された機材がそろった氏のKIM Studioにあって、FOCUSRITE製品は確固たるポジションを築いているようだ。

これまで、さまざまなFOCUSRITE製品を使ってきましたが、中でもISA 430(D)は、まさに欲しいと思っていた仕様でした。外部の録音でもこれを2台持っていけば、レコーディングでもミックスにも使え

て自分の思ったような音にできる。まさに“Producer's Pack”だと感じます。EQノブの大きさやレイアウトも良く、自分の思うように音が作れるので、とにかく使っていて“気持ちいい”んですね。

音質的には、トランスにこだわっているところが特徴的。録り音に透明感があるのに細くならないんです。ISAシリーズはボーカル向きというイメージがあるかもしれませんが、私は逆にソリッドなギターなどに多用しています。演奏のソリッドさを損なうことなく、そのまま収録できるからです。

このように優れたアナログ特性を持つISA 430(D)にも、デジタル出力が搭載されています。“アナログとデジタルの融合”という一見何気ないテーマは、長い歴史と高い技術、新しいものに対する飽くなき追求心／想像力がバランス良くそろって、初めて実現するものだと思います。FOCUSRITEはそれを実践している数少ない一社だと思いますし、向かっている方向性は、エンジニア／プロデューサーとして私自身がいつも心掛けていることに近いような気がします。



New Product Review

## ISA One

オープン・プライス  
(市場予想価格/100,000円前後)

Photo: Hiroki Obara

## パーソナル・ユースに適した最新の1ch仕様ISAマイクプリ

by 飛澤正人

## ISAの音質をランチボックス型のボディに搭載

1980年代後半、レコーディング業界はハイファイ指向の真つただ中。そんな時代に生まれたのがFOCUSRITE Forteコンソールだった。ISA Oneは、そのコンソールのISA 110モジュールと同一のヘッド・アンプをランチボックス・タイプのボディ搭載した1ch仕様のマイクプリだ。

仕様を説明していこう。まずインプット・セクターはMic/Line/Instの3種類。Mic入力では30dBステップ・アップ(またはダウン)できる30-60スイッチにより $\pm 60$ dBのゲイン調整が可能だ。さらにインピーダンスが4段階で設定可能なのが大きな特徴で、この機能によりダイナミック・マイクからリボン・マイクに至るまでおおよそどんなソースにも対応できる。フロント・パネルにあるInsertスイッチをオンすればリア・パネルのSend/Return端子につないだコンプやEQなどをインサート可能だ。真ん中に配置されたMC式のVUメーターはとても見やすく、右にあるPost Insertスイッチをオンにすればインサート後のレベルを確認できる。

本機のDIには別系統のGainノブが付いており、

+10~+40dBの連続可変式。こちらもインピーダンス切り替え可能なので(470K $\Omega$ /2.4M $\Omega$ )、パッシブからアクティブまで幅広いライン楽器に対応できる。その右にあるAmp端子(フォン)は、DI入力された信号をアンプに送るためのものだ。

出力端子はMain/DI各1系統で、別売りのデジタル・カードをインストールすれば、最高24ビット/192kHzでのデジタル出力が可能になる。また本機にはPhones端子が付いているのも興味深い。

## ヌケが良くシャキッとしたハイファイ・サウンド

まず始めにシンプルな使い方からサウンドを検証していこう。エレキギターを直接DIに入力し、Main出力からオーディオ・インターフェースへ。さすがに高域のヌケがよく、カッティングなどはとても歯切れよい。4kHz~8kHzに特徴があり、シャキッとしたサウンドが印象的だ。中域から低域にかけてはフラットな特性で、パワー・コードやベースを弾いた場合でも物足りなさを感じることなく、とても演奏しやすい。コンプをインサートしてチェックしてみた感じも良好。例えばライブ時のプリアンプとして使用すれば、音質向上という意味で効果があるだろう。

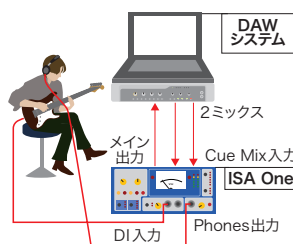
## 有効な使用法①~2ch同時レコーディング

ISA Oneはマイク/ラインどちらかの入力ソースと、DI入力されたインストゥルメントを別系統で独立した2chにレコーディング可能だ。例えばボーカルとギターを同時に録音したり、DI入力したギターのダイレクト音とアンプに送ったディストーション・サウンドを同時に録るなど、この機能を使えば後の音作りにも幅が生まれる。

## 有効な使用法②~ISA Oneをキュー・ボックスに

まずフロント・パネルのCue Mixボタンを押す。次にDAWで制作中のオケの2ミックスをCue Mixに入力。ギターなどをDAWで録音可能状態にすれば、このISA Oneがキュー・ボックスに早変わり。ランチボックス型のボディを手元に置いて操作できるのは、本機ならではの使い心地と言えるだろう。レイテンシーが気になる場合はバック・トラックのどちらか一方をEXTに入力。オケはモノになってしまうが、この場合入力ソースは直接モニターできるので、レイテンシーを気にせず録音できる。

このように本機はシンプルな構成ながら、自宅スタジオやライブの現場でギタリスト/ボーカリストに1~2ランク上のサウンドを提供してくれるだろう。



▲ISA Oneをキュー・ボックスとして使用する際の接続例。Cue Mixボタンを押した状態で、DAWで制作したオケの2ミックスをCue Mixに入力すると、ISA Oneでオケを聴きながらギターなどのダビングができるようになる



▲リア・パネル。上段は別売りのデジタル・カードDigital Board 430II(本体価格78,750円)に搭載される端子類で、左よりAES/S/P DIF切り替え式のデジタル出力(D-Sub9ピン)、S/P DIF出力(オプティカル)、ADAT出力(オプティカル)、ワード・クロック入出力。中段左よりステレオ仕様のCue Mix入力(TRSフォン)、EXT入力(TRSフォン)、Return/Send(TRSフォン)。下段左よりDI出力(XLR)、メイン出力(XLR)、ライン入力(TRSフォン、XLR)、マイク入力(XLR)

## SPECIFICATIONS

## マイク入力

■ゲイン・レンジ/0dB~60dB:10dBステップ、+20dB可変  
■入力インピーダンス/Low:600 $\Omega$ ; ISA110:1,400 $\Omega$ ; Mid:2,400 $\Omega$ ; High:6,800 $\Omega$  ■周波数特性(0dB)/10Hz(-0.5dBダウン)~125kHz(-3dBダウン)

## ライン入力

■ゲイン・レンジ/-20dB~10dB:10dBステップ、+20dB可変  
■入力インピーダンス/10k $\Omega$ :10Hz~200kHz ■周波数特性(0dB)/10Hz(-0.3dBダウン)~200kHz(-3dBダウン)

## インストゥルメント入力

■ゲイン・レンジ/10dB~40dB:連続可変 ■入力インピーダンス/High:1M $\Omega$ 以上; Low:300k $\Omega$ 以上 ■周波数特性(10dBゲイン、-10dB入力)/10Hz~100kHz  $\pm 0.6$ dB

■外形寸法/220(W) $\times$ 120(H) $\times$ 294(D) ■重量/3kg



## LIQUID 4 PREを選べば異なる音質のマイクプリを4基所有できるのです

インタビュー ■ クリス・グッディ Transation: Peter Kato Photo: Chika Suzuki

さる4月25日、東京・渋谷のRock oN Companyにおいて“Focus for FOCUSRITE”セミナーが開催された。これはFOCUSRITE本社よりクリス・グッディ氏を招き、LIQUIDシリーズの最新モデルであるLIQUID 4 PREをより深く知ってもらおうというもの。同社が送り出す“最新鋭ビンテージ”の実力とは？ ここではグッディ氏の談話を中心に、当日の模様をレポートしていこう。

グッディ氏はまずLIQUIDシリーズの開発に至った時代背景について語り始めた。

「LIQUIDシリーズのコンセプトをもたらしたのは、開発当時の市場で見受けられた3つの大きな変化でした。まず第一にオーディオのプロと呼ばれる方々の仕事のやり方が急激に変わり、アウトボードとDAWのさらなる統合がニーズとして高まっていました。第二にプロジェクトの締め切りがどんどん短く設定される中、制作現場の方々が、より柔軟かつ効率的な作業環境を求めるようになっていました。さらに第三の変化として、制作予算が引き締められた結果、古きよき時代なら当たり前のように見られたアウトボード・ラックが所狭しと並んでいた光景が、プロ・スタジオに行ってもなかなか見られなくなっていました」

LIQUID CHANNELはこうした変化に対応すべく開発されたLIQUIDシリーズ初の製品だった。

「第一のニーズについては、ユーザーが設定したマイクプリやコンプのパラメーターをすべて保存／呼び出すことができるようにした上、バンドルのLiquid4Controlソフトを使えばコンピューター上で

LIQUID CHANNELをリモート・コントロールできるようにしたことで対処しました。また第二のニーズについては、幾つものマイクプリやコンプの設定を呼び出せるようにすることで対応しました。従来のアウトボードならパッチングなどに膨大な時間をかけなければできなかったプリアンプのテストが、極めて短時間で行えるようになったのです。さらに第三のニーズについては“これ1台買えば、すべてを所有できる”オールラウンドな製品にすることで対応しました。かつてなかったタイプの製品がようやく登場したのです」

そのLIQUID CHANNELの革新性を引き継ぎつつ、ライブ録音など、より大規模なシステムへの対応を目指して開発されたのがLIQUID 4 PREだ。

「LIQUID 4 PREの開発は予想以上に長くかかりました。2Uサイズのボディに4ch分のプリアンプを収納しなければならないため、回路を大幅に小型化しなければならなかったからです。もちろん高い柔軟性を誇るLIQUID CHANNELのプリアンプ処理を1台で4ch同時に行えることを可能にするのが製品の基本コンセプトでした。さらに言えば、放送局、ライブのPAなど、規模の大きなスタジオや施設での使用が念頭にありました。こうしたスタジオや施設では、機材本体が設置されている場所と、操作が行われている場所が100m以上も離れているケースも珍しくありません。そうした環境に対応できるようにと開発されたのがEthernetコントロール機能です。さらにオプションのEthersound Cardを加えれば、最大64ch分のオーディオ・データを本体からEthernet経由で出力することができるよ

うになり、PA現場でも価値のある製品と言えます」

セミナーでは、そうした現場でのLIQUID 4 PREの使い勝手を大きく向上させるコントロール・ソフトLiquid4Controlを紹介。それに加えて、LIQUID 4 PREの設定をDIGIDESIGN Pro Toolsのセッション・ファイルに保存できるようになるプラグインTDM/RTAS 4 Control (次ページ参照)が世界で初披露された。

さて、いよいよLIQUID 4 PREのサウンド・チェックだ。まずはプリセットによる音の変化を検証。グッディ氏が自らAKG C414-XLSを操りマイク・チェックを行う。話し言葉程度ではあるが、それでもISA 110とTELEFUNKEN V72の各プリセットのキャラクターの違いは歴然だ。続いてプリセットと実機との聴き比べも敢行。ピアノのCD音源を用いたISA 110のプリセット／実機のブラインド・テストでは、参加者の回答が完全に2分されるなど、実機のサウンドの再現精度の高さが実証される結果に。これで場内の雰囲気は一気に高揚、質疑応答が続出するなど、熱のこもったセミナーとなった。



▲参加者のモチベーションの高さが印象的だった



# ビンテージ機材のサウンドを再構成するLIQUIDテクノロジー

インタビュー ■ ロブ・ジェンキンス Translation: Peter Kato

## デジタル/アナログのハイブリッドが決め手

●LIQUIDテクノロジーとはどのようなものか、あらためて説明いただけますか？

○ひと口で言えば、ビンテージ機材のサウンドとフィールを再構成するものです。その要となるのが“ダイナミック・コンボリューション”という技術で、これは測定によりキャプチャーしたサウンド・データをEQやコンプレッション効果の再現に適用するアプローチです。さまざまなマイクプリの入力インピーダンス・カーブをアナログ回路で処理する一方、オリジナルのプリアンプ・サウンドをダイナミック・コンボリューションをベースに開発したDSPで再現するという、デジタル/アナログを統合したハイブリッドな方式を採用しています。

●ではダイナミック・コンボリューションとは？

○測定対象となるオリジナル装置の入力/出力のインパルス信号で測れば、そこから得たインパルス測定反応データを基にその装置に入力されるあらゆるオーディオ信号の変化を算出でき、さらにはそのデータに基づく変更を基に、入力信号をそのオリジナル機材の特性通りに書き換えるアプローチです。さらにインパルス測定では、あらゆる設定で、さまざまなレベルのインパルスを集め、レベル変化によるオリジナル機材のサウンドの変化をも正確に再

現できるようにしました。

●LIQUIDテクノロジーがほかのエミュレーション技術と一線を画しているところとは？

○私たちが収集したデータ量の膨大さと、サウンドだけでなく、操作子のフィールにまでこだわったオリジナル機の再現性、欲しい音色がすぐに得られるというサウンド・ソリューションとしての完成度の高さにあると思います。例えばあるビンテージ機材のエミュレーションでは、データの収集、データベースの構築、テストといった一連のプロセスを終えるのに3カ月もかかりました。LIQUIDシリーズであれば、そこまで精密に測定されたデータに基づくサウンドを即座に利用することができるのです。

## DAWと統合して使える21世紀のマイクプリ

●LIQUIDシリーズの開発コンセプトについて聞かせてください。

○LIQUID CHANNELはレイテンシーを低く抑えたスタンドアローン機で、リアルタイム・レコーディング向けの製品です。LIQUIDテクノロジーによるマイクプリ/コンプレッサーが使えるほか、オリジナルのデジタルEQが搭載されています。LIQUID MIXはダイナミック・コンボリューションをベースにしたEQとコンプを32chにわたって提供するDSP拡張装置で、いわゆるプラグインと同じような形で

DAWと組み合わせて使うことを念頭に開発されました。

●LIQUID 4 PREを導入するメリットとは？

○最大の恩恵は、スイッチを押したりマウスをクリックするだけでレコーディング・パスの音質を劇的に変化させることができる点でしょう。さらに言えば、LIQUID 4 PREはDAWソフトと統合して使える21世紀のマイクプリです。プラグインと同じようにコントロールしたり設定を保存/呼び出すことができ、現代的な録音環境によく融和します。

## Line Up



### LIQUID CHANNEL

420,000円

ダイナミック・コンボリューション技術により、さまざまなビンテージ機材のサウンドをよみがえらせた“新世代”のプリアンプ



### LIQUID MIX

オープン・プライス

コンプ/EQの名機の出音をDAW上で実現するハードウェア&プラグイン。高速DSPの搭載により32chで使用可能

## Topic LIQUID 4 PREとPro Toolsを統合するソフトが登場!



前項で紹介した通り、“Focus for FOCUSRITE”セミナーにおいてLIQUID 4 PREとDIGIDESIGN Pro Toolsを統合するソフトTDM/RTAS 4 Control(画面はRTAS版)が世界初披露された。

TDM/RTAS 4 ControlはPro Tools上でTDM/RTASプラグインとして動作。通常のプラグインと変わらない操作で、LIQUID 4 PREのゲイン、プリセットの種類、Harmonicsの量、ファンタム電源の有無、ハイパス・フィルターなどの設定を、各チャンネルごとにPro Toolsのセッション・ファイルに保

存できるようになる。

また、TDM/RTAS 4 Controlの導入により、LIQUID 4 PREの設定をIconなどのDIGIDESIGN製コントロール・サーフェスで制御可能(Venueは除く)。大規模会場で複数のLIQUID 4 PREをマイクプリとして使用し、Pro Toolsでライブ・レコーディングを行うようなシチュエーションで、シンプルかつ効率的なソリューションを提供してくれるだろう。なお、このTDM/RTAS 4 ControlはFOCUSRITEのWebサイトにて無償でダウンロードできる。

## ブロードキャストの現場でも活躍するLIQUIDシリーズ



▲取材に応じていただいた中京テレビ放送/制作技術部:長谷川氏(左から2人目)を中心に、左より中京テレビ映像企画/技術部/音声:山内氏、日比野氏、光清氏

中京テレビ放送では現在2基のLIQUID CHANNELが稼働しています。テレビ局の幅広い用途に対応できるアウトボードとして考えたときに、コスト・パフォーマンスが非常に高かったことが導入の一番の決め手でした。1基はMA室で主にナレーション用のマイクプリとして使用。もう1基はニュース副調整室にあり、デジタル・コンソールTAMURA AMQ5500にAESでインサート、コメント・グループのトータル・コンプとしてNEVE 33609のプリセットをかけています。

弊社は長年33609を愛用してきたのですが、LIQUID CHANNELのセットアップ・モードで

“As original model”に設定すると、アタックなど本来33609では触れなかったパラメーターがエディットできるようになり、まさにかゆいところに手が届くような感覚が得られます。テレビ局のデジタル卓は内部完結できるメリットはありますが、必ずしも優れたダイナミクス系エフェクトが内蔵されている訳ではありません。その点、LIQUID CHANNELをインサートしたおかげでコメントが前に出てくるし、ミックスが楽になりました。プリセットを試すといろいろ勉強になったりしますし……あと、ニュースの現場なので24時間電源が入りっぱなしですが、今のところトラブルフリーなのもいいですね。

# Professional LIQUID Series



## 01 村田智宏 (Daimonion Recordings)

**LIQUID CHANNELの抜けの良さは  
ほかのプリアンプでは出せない**

Photo: Hiroki Obara

Daimonion Recordingsを拠点に、青山テルマ、PUSHIM、ライムスターなど豊富なラップ/ボーカル録音の経験を持つ村田氏。日々の制作にあってLIQUID CHANNELはボーカル用マイクプリとして欠かせない存在だという。

これまで声録りにはさまざまなブランドのアナログ・マイクプリを使用してきましたが、“そろそろ違った味の製品を試してみたい”と思っていたタイミングでD.O.I.さんが「LIQUID CHANNELという新

製品が出るらしい」という話を持ってきたんです。早速スタジオでテストしてみたら、録り音の感触が非常に良かったので導入しました。

プリアンプ/コンプのプリセットはいろいろと試してみましたが、最近には音に色付けの少ないAPHEX Model 1100&EMPILICAL LABS EL-8 Distressorの組み合わせを使うことが多いです。このスタジオではヒップホップ/R&B系の声録りを行うことが多く、バキバキした最新のバック・トラックに乗せても“抜けて”くるボーカルが求められる。スタジオ

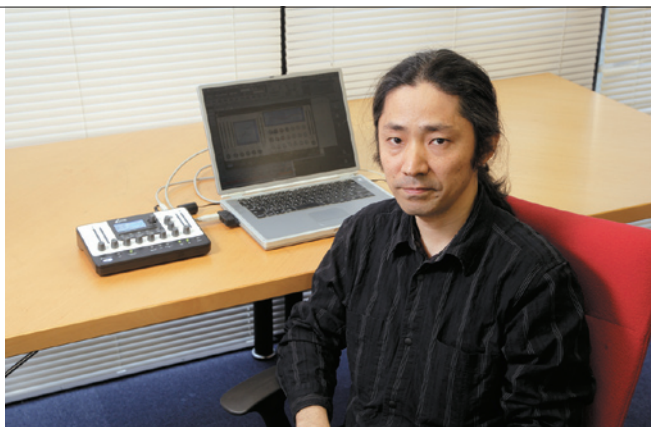
標準のマイク=SONY C-800Gとの相性もあるのですが、そもそものアナログ回路の音が良いと言いか、特に声の抜け方は絶品で、ほかのプリアンプでは絶対に出せません。逆にボーカリストの声が細いと感じたときは、NEVEなど太くなるタイプのプリセットを使って作り込むこともあります。

AES/EBU、ADATのデジタル出力も標準で付いていて、DIGIDESIGN Pro Tools環境で使い勝手がいいのもポイントが高い。日々の仕事でこれが無くなると、ちょっと困りますね。

## 02 原口宏

**コントロールしやすいLIQUID MIXは  
特に生楽器の処理に薦められます**

Photo: Hiroki Obara



細野晴臣、鈴木博文関連作品を中心に、ロック・バンドの一発録りからエレクトロニカまで幅広い音楽性をカバーするエンジニアの原口宏氏。最新のプラグイン事情にも造詣の深い氏が最近導入したというLIQUID MIXの実力とは？

読者が最初に気になるのは実機の再現性だと思うんですが、ダイナミック・コンボリューションの性質上、特にEQの再現性はいいです。例えばNEVE 1073タイプでスネアの高域を持ち上げても、ちゃん

と耳に痛くならないで自然にハイが上がってくれます。ほかにもPULTECモデルの質感なんか絶品です。もちろん実機のように通すだけで音像が変わるというわけではなく、あくまでもEQのカーブや音色の変化具合が同じという感じですが、音楽的にはこれで十分。むしろ余計な音色変化が無い分コントロールしやすく、ほかのプラグインで質感を作れるだけのクオリティが残っていることの利点の方が大きいと思います。

一方、コンプレッサーの方はEQに比べると実機

の再現という意味では若干分が悪く感じますが、1基のプラグインとして考えた場合には、これほどさまざまな動作が可能なコンプは珍しいでしょう。パラメーターを追い込めばボーカルもきちんと処理できますし、ドラムなどに深くかけた際の質感もワイルドでいい感じです。

コンプレッサーとは別にリミッターが入っているようで、入力を上げて自然とピークは抑えてくれるので普段の作業でも使いやすいですし、特に生楽器の処理に薦められます。



New Product Review

## LIQUID 4 PRE

493,500円



Photo: Hiroki Obara

## エミュレーション以外の基本性能も高い“夢のような”マイクプリ

by 橋本まさし

## Ethersoundで大規模PAシステムにも対応

既に高い評価を受けているLIQUIDテクノロジーを採用したシリーズ3番目の製品。DSPによる味付けは歴史に残るさまざまな“名機”と呼ばれるマイクプリをモデルにしたプリセットを40種類搭載。NEVE 1073をはじめAPI、TELEFUNKEN、TRIDENT、AMEK、SSL……新しいものではMILLENNIAなど、とにかく“無いものは無い”というほどのオールスター・キャスト。さらに設定は最大99までメモリーが可能で、さらに多数のプリセットがWebサイトにアップロードされており(www.focusrite.com/support/liquid\_assets/liquid\_mic\_pres)、ユーザーは自由にダウンロードできる。

本機は4chそれぞれが最大192kHzでのデジタル入出力に対応。AES/EBU、ADATのほか別売りのEthersound Cardが使用できる。PAの現場で徐々に普及しつつあるEthersoundだが、Liquid4 Controlを併用すれば、ほぼすべてのDAWから複数のLIQUID 4 PREをリモート・コントロールでき、特に大規模な会場で威力を発揮しそうだ。またLIQUID CHANNELとの違いとして入力インピー

ダンスの切り替えが可能になっており、マイクの特性を最大限引き出せるのも、“マイクプリ”としての個性がより強まったと感じる部分だ。

ほかに興味を持ったのが“セッション・セーバー”。チャンネル入力信号が0dBを超えると自動的にデジタル・クリップを回避して1dBステップでゲインを下げてくれるというデジタル機器ならではの素晴らしい機能だ。“目からうろこ”というか、特にライブ・レコーディングには効果を発揮しそう。これさえあれば、これまで幾つ失敗を避けられただろう……。

## プリセットは実機のサウンドに酷似

実際に使用してみたの感想。正直に白状すると古い人間の先入観で、デジタルによるエミュレーションが、どうしてもイミテーション的なものに感じられていた。しかし本機を1時間ほど使っているうちに印象が変わってきて、“これはヤバいかもしい!”という思いと共に、自分の先入観が間違っていた事に気付いた。

プリセットに関しては、スタジオ・ダリにあるNEVE 1073、TELEFUNKEN V72、DRAWMER 1960と聴き比べてみた。確かに“鬼聴き”すれば実機と

の違いはあるが、“かなり似ている”ことは確か。特に高域の倍音や全体の周波数特性カーブの感じは酷似しているし、低域の飽和感もかなり近い。あえて言えば、低域の“奥行き感”だけは物足りなさを感じたが、オケ中で聴き分けるのは不可能だろうし、これだけ多くの名機のサウンドを1基で得られるのだから、夢のようなマイクプリと言える。

フラットな状態での出音も素晴らしいが、もう1つ個人的にかなりお気に入りの機能が、倍音の色付けを15段階で調整できるHarmonics。実際ストリングスのダビングに本機を使用してみた。フラットの状態ではレベル調整してからHarmonicsを上げていくと、オケ中でのストリングスの存在がまさに“色”が変化していく”ように変わっていく。これはかなり病みつきになりそうだ。

このようにLIQUID 4 PREはエミュレーションという特徴を除いても、素晴らしいパフォーマンスを発揮してくれた。使い始めは録り音をいじる事に不安があったのだが、それに慣れれば、この上なく楽しいブリアンプと言える。そして、“これからのマイクプリ”の形を前向きに提示する、素晴らしい機材だと認識した貴重なレビューであった。



▶オプションのEthersound Card (157,500円)。これを装着することにより、最大64ch分のオーディオデータのやり取りが可能になる

▶Liquid4Controlを使用すれば、1台のコンピューターで複数のLIQUID 4 PREを制御可能。大規模なライブ会場でも一括してマイクのゲインをコントロールできるなどメリットは大きい



▲リア・パネル。上段左からマイク&ライン入力(共にXLR)×4、ライン出力(XLR)×4、下段左からADAT入力、ADAT MAIN出力、ADAT AUX出力、AES/EBU入力、AES/EBU出力×2系統、ワードクロック入出力(BNC)、イーサネット・コントロール接続端子

## SPECIFICATIONS

- 周波数特性 / 20Hz~20kHz/±0.05dB
- サンプリング周波数 / 44.1/48/88.2/96/176.4/192kHz
- ビットレート / 24ビット
- 外形寸法 / 484(W)×85(H)×270(D)mm
- 重量 / 5.3kg